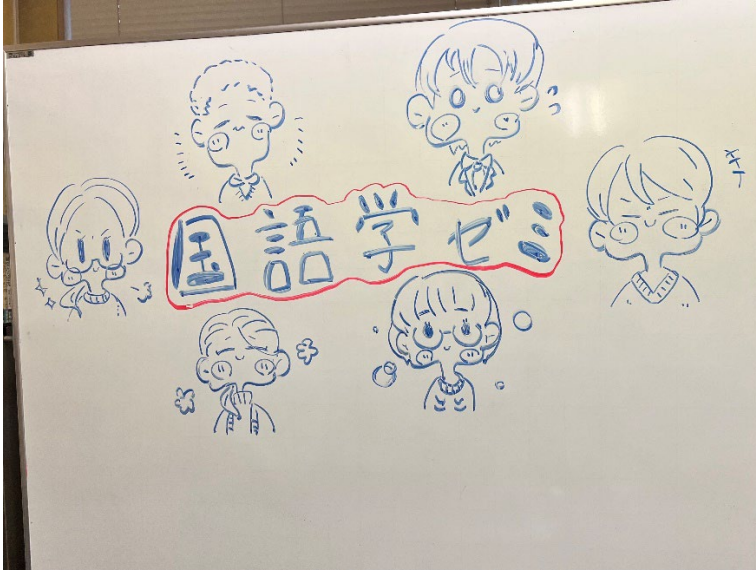


研究室開始（2023年4月）

4年生4名はゼミ討論に対して非常に活発で、今年度着任した私は驚きました（油断していると教員が一言も話さない勢いです）。教員志望のゼミ生が多く、小学校から高等学校までの教材を輪読することを中心に活動しました（前任の川嶋秀之先生にもご参加いただきました）。ゼミ生が、ゼミメンバーの絵を描いてくださりました。



4年生の日々のゼミにて

・三浦哲郎『盆土産』

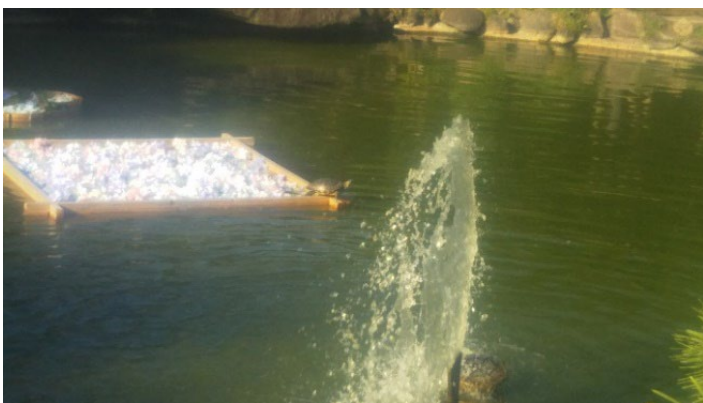
中学校二年生の教材で、しばらく当時の私のクラスで「えんぴフライ」が流行したことを思い出しました。作者は青森県出身であり、「えんぴフライ」には東北方言の鼻音と濁音の関係がよく現れています。日本語の音声について考える契機にもなりました。

んだら、さいなら、と言うつもりで、うっかり、「えんぴフライ。」と言ってしまった。
バスの乗り口の方へ歩きかけていた父親は、ちょっと驚いたように立ち止まって、苦笑いた。「わかってらぁに。また買ってくるすけ……。」

「言ってしまった」「苦笑いた」という表現から、この場面の「えんぴフライ」は言うことを憚られる表現であると考えられます。「父親」は青森から東京へ出稼ぎをされていて、わずか一日半の休暇をもらい、エビフライをお土産に家に帰っています。家族を思って買ったエビフライは、父親の過酷な労働と裏返しのものです。父親の発言に黙読（……）が用いられ、明るい家族団欒の裏にある、暗い労働のことを思い出していると考えられます。

保和苑の散策

梅雨の時期に、紫陽花の名所として知られる保和苑を散策しました。紫陽花は萬葉集にも詠まれた由緒ある花です。池では亀がひなたぼっこをしていました。



3年生の日々のゼミにて（2023年11月～）

3年生4名でゼミが始まりました。4年生ゼミに慣れすぎたのか、はじめは3年生ゼミがおとなしめに感じましたが、最近は意見がたくさん出ています。私がもともといた研究室は、一匹狼のような方が多かったので、この一年はとても新鮮です。

・教育実習の研究授業の視聴

ゼミ生の希望で、附属小中学校教育実習での研究授業を撮影したビデオを視聴しました。国語選修では昌子佳広先生が中心となり、毎年研究授業のビデオ撮影を行っています。視聴すると、学生の研究授業が独創的で圧倒されました（附属小中学校の先生方に厚く御礼を申し上げます）。ゼミ生自身も成果と課題をしっかりと報告していました。

・今井むつみ・秋田喜美『言語の本質』（2023年、中公新書）の講読

概説書でも教材でも国語学の資料でも構わないので、読みたい文章を読もうということで、ゼミの活動を進めました。フィラー（話す際に間を埋める「えー」「うーんと」「なんか」などの言葉）が言語の性質に当てはまるかどうかという問題意識を持ちながら、『言語の本質』60頁以降の言語が持つ性質（原則）の記述を輪読しました。討論が進む中で、『明解日本語学辞典』（三省堂）のフィラーの項目（定延利之先生執筆、133頁）を読み、ゼミ生がフィラーに典型的な「えーと」「あー」だけでなく、（分からないことを表す）「さー」も挙げられていることに気付きました。

「えー」のようなフィラーは非言語的な咳払いなどの類に近く、（分からないことを表す）「さー」のようなフィラーは言語に近いというように、フィラーにも幅があると考えさせられました。教員の私こそ、ゼミ生から教わることが多いと実感される日々です。

卒業研究発表会（2024年2月15日）

4年生の卒業研究発表会が開催されました。国語選修の4年生全員が、卒業論文をもとに20分間の発表をし、その後10分間の質疑をします。4年生は自分の研究を分かりやすく伝えていました。質疑では3年生、4年生を中心に発言していて、1年生、2年生にとって、模範となっていたと思います。ゼミ生に限りませんが、4年生の努力した姿を見て感動しながら拝聴しました。



研究室の様子

私の研究室は、教育学部 D 棟 406 にあります。既に本を入れる場所がなくなりつつあります。



学生には当時の写本、版本、卷子本などに触れてほしいと思っています。できれば文献調査に行きたいのですが、なかなか難しいので、ここでは私の所蔵本を一つ紹介します。

・馬淵和夫旧蔵本、文雄『三音正譌』

文雄（もんのう）の著した『三音正譌』（さんおんせいとか）二巻は、日本漢字音である呉音、漢音、華音（唐音）の三音に関して、その正訛（譌）、つまり正しいか誤りかを述べた本として知られています。文雄は、中国近世音を用いて『韻鏡』を研究して『磨光韻鏡』を著し、後の音韻学・悉曇学研究に大きな影響を与えました。字音仮名遣い研究の基礎となった本居宣長の字音研究にも、文雄の成果が受け継がれています。

馬淵和夫先生は、音韻学・悉曇学などに多数の業績を残した国語学者で、『日本韻学史の研究』（1962-1965年、1984年増訂版）、『国語音韻論』（1971年）、『国語史叢考』（1996年）などの著作があります。『日本古典文学大辞典』の「文雄」の項は馬淵先生が執筆しており、『三音正譌』にも触れています。

この本は「馬淵蔵書」の印記があり、宝暦二年（1752）の本奥書を持ちますが、次いで「天明八年戊申（1788）十一月購版」の刊記があります。インターネット上で閲覧できる早稲田大学や関西大学が所蔵する『三音正譌』と比較すると、この本には、注記の付箋が上巻に多く付されています（注記の典拠は『字彙』が多いようです）。

上巻は漢文（訓点、声点あり）、下巻は漢字片仮名交じり文が主です。国語学の資料は漢文のものが少なくありません。このような資料に触れることで、学生に漢文を読むことの大切さも実感させていきたいと考えています。

